

空



2005年

SORA 10号

晴夜 (10) | 1

柴田 佐知子

齒朶刈りのあたりが少し動くのみ

虎落笛放ちて黒き塔五層

生きてゐるかぎりは檻の鷲ならむ

冬ぬくし千手の中に母の手も

どこからを溺ると言ふ黒シヨール

会ひにゆく千の狐火揺るとも

激流を魚の通へり山桜

火の山を曳きずりて野火走りけり

その辺り耕してをり古墳守り

遠
蛙

高倉和子

菜の花や古墳の裾のやはらかき
振りかざすものなどなかり春愁ひ
筍の皮剥ぐ声の太くなる
枝蹴つて空に溶けゆく春の鳥
山よりの風吹き抜けて露を煮る
放言のあとの苦さや遠蛙



磯遊び背中に夕陽せまりたる

恋猫の戻りて声を忘れをり

騒がしき風のこもれる巢箱かな

青空の片寄つてゐる蕨狩

万緑や肩を組みたる山ばかり

雨粒に乱れてゐたる蟻の道

沈丁花声囁るるまで泣きしころ

滴りの山に伏したる岩あまた

滝しぶき浴びて無欲となりにけり

昔から恐いものに地震、雷、火事、親父（ただし今では親父の威力は風前の灯に近いようだ）というが、今回ほど身に沁みたことはなかった。突然やってくる地震の前では人間は全く無力である。

最初の地震のときは法事で実家に居た。数人で料理をしていたのだが、揺れ始めたらただ慌てて皆で部屋の真ん中に集まっただけであった。揺れがおさまった後でようやく火を使っていたことに気が付いた位である。福岡は地震がないと何故か勝手に思い込んでいたので、余計に動揺が激しかったようだ。まだまだ余震が続いているが、車の揺れにも敏感になっていることにも驚く。

刻ゆつくりと

中田みなみ

矢車や水辺の闇のやはらかに

飛行機の音眩しみつ粽解く

母の日の刻ゆつくりと花時計

風鈴やこころ遠くにあそばせて

夕立の叩きははじめし葉蘭かな

初蟬や炭を沈めて水浄め

一九九七年春、国家試験の発表待ちの息子が、スペインでも行きたいナアと言いつ出した。金主はこちら。ナイトに良しとばかりに私は賛成し、彼は早速、出発直前のツアーに申し込めたと意気揚々と帰って来た。当日、成田に集まって驚いた。ハネムーンの旅だったのである。私達以外に四十、五十、六十代のご夫婦が一組ずつ居られたのは神の救いで、ああ、俺はバカだった、ウカツだったとボヤイテいる彼の姿は哀れだった。

旅の最後の二泊は南海岸のマルベリアの自由行動で、添乗員なし。私は仮名付のスペイン会話本を片手に、希望者八人とカサレレスの丘へ廢墟の古城を見に出掛けた。

花野の丘には、日本ではドライブラワーにするスターチスが雑草の様に咲き、頂の小さな古城に近づくともやうら騒がしい。力一杯鉄扉を開くと鶏がとび出した。養鶏場となっていたのであった。帰り道で揃いのTシャツの男性一団とすれ違った。「日本人？」と尋ねられたので私も「何処から？」と訊くと、一人がポン！と広い胸を叩いた。成る程、OMEGAとプリントし

櫛ささぐ腕真つくる船祭

大西日漁夫の手拭砂こぼれ

蟻の黒水の如くに流れをり

紙の音たてて翳りし祭花

魚割くや隣り岬の花火音

抗はず生きて来しごと踊りけり

涼風やアスパラガスの切り口に

髪切蟲歯ぎしり鳴きをして逃げし

袖に透く白き腕やバルコニー

である。その夜のデイナターの席は衝立て仕切られ、既に酔っているスイス人の彼の一人が立ち上るなり、「OMEGA GOOD! SEIKO NO GOOD!」と叫ぶや数人が同調し始めた。聞き流していたものの、だんだん吹き荒れる風の中に座す気分で、味もおぼつがなく、腹が立つてきた。昔からオメガは有名だが、家内工業的に過ぎなかったので、時代に押され、確かその頃、セイコーに吸収されたとか言う記事が新聞にあったのを思い出した。

私はグループに私達も声を挙げましょう。但し、OMEGA NO GOODでは煽動となり、同じレベルに下がるので、SEIKO GOOD、OMEGA GOOD TOOと言いましようと言案した。すぐ息子がノリ、続いて六十代、五十代のご夫婦と四十代の男性とで立ち上り、二回叫んだ。新婚さん達は無表情であった。衝立の向こうはそれっきり静かになった。翌朝、バイキングのフルーツの前で、昨夜最も大声で叫んでいた太ったOMEGA氏と肩がぶつかった。彼は微笑み乍ら、どうぞという風に身を引いた。私も微笑みを返した。

あの時、皆で声を挙げていて良かったと、今も思う。折角の旅に暗いものを残さずに済んだのだから。

芹の水

高 千夏子

杉花粉調伏せるや荒法師

ひゝなどち眞夜は位階を外すかも

日差せば呂翳れば律や芹の水

明治より昭和の遠き櫻かな

しらうをを飲みももいろの暮色かな

伴天連も芸者も転びきんぼうげ

今年の一月半ば、仕事から戻った私に母がI氏という著名な俳人から電話を昼間頂いたと云う。「本日から、しばらく旅に出るので宜しく。それだけで判るから…」と仰ったとの事。I氏からは、以前意味不明のお手紙を頂いたが、一応ご返書の記憶あるのみ。棟方志功の絵のような原色感の激しい句風の方。ご縁もなく、ぴんと来ない。不思議で氏のお宅に電話。息子さんの言では、「親父は何処に行ったか判らない。今夕食作りの最中」と電話を切られてしまった。仕方なく、氏のお弟子の方から句集を頂戴しているので、その方に電話。「先生は心筋梗塞の手術で、今日ご入院です」と伺った。何故、入院の日に電話下さったか判らず、日が経ち、或る会で退院なさっていると分かり、お電話。「貴女にS先生の電話番号を伺おうと思つて掛けたの」と仰り判明した。I氏は元郵便局勤務。S氏は当時の郵政事務次官。私の旧知

漆黒の髑髏あるべし花の下

春のまくなぎ悪女大姉と云ふべかり

春の蚊の耳打ちほどの艶聞や

名誉教授の口癖イツトあらせいとう

トトロの森行けど行けどもえごの花

安産の護符飲んでゐるおぼろかな

花冷えのもつとも指に人形師

葉櫻や深川飯は大盛りに

鉄線花昼の芸者屋小暗しよ

の方で、それをI氏宛の手紙に書いた記憶が蘇った。

I氏はS氏を尊敬。句集の後書きにもその事を書かれている。お独りで入院なさって、退院なさった由。S氏と疎遠になっていて、パワーを頂きたかったようだ。早速、私も疎遠のS氏宅に電話。奥様が「あー、主人は半身不随となり、声も出ません」と仰る。郵便番号の導入者で、退官後大手電気会社の副社長だった方は、八十一歳の現役の時倒れ、今八十六歳。頭脳はしっかりなさっておいでの事で、拙句集と心からのバレンタインチョコをお送りし、I氏にもその旨お伝えした。高潔なお人柄だったS氏は、車椅子人生になりながらも老俳人の生きる意欲を、再度お与え下さったようだ。栄光のこのお二人の人生。淋しいと思う。今を、一所懸命、私も生きよう。

弥撒の燭

荒井千佐代

調律の音を遠くに桃咲けり

学長の覗きに來たる雛まつり

父在さば父掛けくれむ雛の軸

聖歌弾くオルガン上に聖枝置き

紺深き海見て暮るる復活祭

蝶生るる被爆天使の石の像



昨夜、市川の友人から電話を貰った。同市のギャラリーで開催中のヘルマン・ヘッセ展での「ヘッセと音楽」という特別イベントの事だった。主にヘッセの詩に曲をつけた歌曲鑑賞だったそうだが、その一部を紹介すると、オトマール・シェック作曲の「霧の中」はフィツシャー・デイスカウ（バリトン）の演奏。リヒャルト・シュトラウ

切りすぎし髪に手をやる朝桜

ねぎばうず十撫でゆかば太平洋

蘖や子に言ふ焦るなあせるなど

袋掛け了ふ潮鳴りの近づき来

南風の窓閉ぢて点せる弥撒の燭

磔像の足下蠟細工めく牡丹

島を打つ卯月ぐもりの波白し

黒揚羽ゆらゆら越ゆる野石墓

大漁旗つらなり帰る花朱燦

ス作曲の「眠りに就くとき」は、カリタ・マッティラ（ソプラノ）の演奏。勿論CD収録のものの鑑賞なのだが、音楽評論家大木正純さんのお話を交えて伺って、羨ましくなった。実は私、先日東京の折、是非訪れたいと思っていた「ヘッセ展」だったのだが、時間不足で中止したのだ。

若かりし頃、夢中で読んだ「ヘッセ詩集」を家中の本棚を探し、やっと見つけた。「昭和四十二年十二月二十五日」と買った日（多分）を記し、「昭和四十六年二月二十日（土）、門司港ゆき鈍行であてもない旅」と、裏表紙に走り書きしている。四十二年から四十六年まで私は、この漂泊の詩人の叙情的な詩集を持ち歩いていたのでろうかと感傷的になつてしまふ。

俳句関係の事で身辺がかためられた現在（自分が不器用だからだが）、演奏会に出向くことも、ピアノを弾くことも、詩を読むことも少なくなつた。これでいいのだろうか。真っ赤の表紙、黒い箱の洒落た「ヘッセ詩集」が私に問いかける。

空集

柴田佐知子選

初不動こずゑにあまた鴉の目

十河波津

雪一寸の筑後路となりにけり
菰の中相照らしあふ冬牡丹
三界に家のみありて豆の花
うすれゆく記憶に土筆ほろ苦し
夏立つや鋼のとほる亀の首
金魚玉置く幸せも余生めく
いつせいに大樹に消えし冬の鳥
マフラーを二巻きしたるさみしき日
「差し上げます」と植物園の雪割草

辻 兎夢